ル　　遥　弥生

「ごめん、よく聴こえなかった。何て？」
イヤホンを当てなおしてからそう訊き返すと、ノイズの霧の向うからようやく戻ってきたサチから『うぅん、大しタこと言ってないからいいよ』という返事があった。机に放り出していたスマホを、椅子に座ったまま、耳からぶらさがるコード伝いに手繰り寄せる。画面を点灯すると、案の定電波が悲鳴を上げていた。
「やっぱ電波悪いねぇ」
『ねぇ』
予報通り大雨は今夜がピークらしく、ふと前に目をやると、窓がガタガタと揺れていた。背後にある扉まで隙間風で震えており、イヤホン越しにも聴こえるほどだ。ガラスには明かりの灯る部屋の中と、ロングヘアーの自分の顔が映り込むばかりで、暗闇に閉ざされた外の景色はほとんど見えない。が、大荒れであることは容易に想像がついた。
「台風、だいぶひどくなってきた感じ」
ぼそっと呟くと、やや間があって
『ほんとに。ワンチャン明日学校ないかも』
といたづらっぽい口調で返された。サチの声にはときどきゴウゴウと雨や風の音が混じる。少しばかり遠いとはいっても、近所の高校に通うものどうし、天候の状況はあまり変わらないのだろう。
「だったらいいなぁ。数学あるし」
『なんか小テストやるみタいな話しテなかっタっケ』
「そうじゃん。うわぁやだな、いよいよガチでなくなってほしい」
さっきからずっと単調なやり取りを繰り返していた。嵐の夜を紛らわすために、他愛ないと思いながらもこうして会話を続けているのだ。サチもたぶん同じ気持ちでいるだろう。そういう呼吸を互いに心得ている友人同士だった。
『なんかさぁ』
やや沈黙が続いたあとで、怪訝そうな声が唐突に耳に飛び込んできた。
『スごい低い、変な音しテない？　そっちで』
「え？　そうかな」
指摘を受けてイヤホンを外す。むこうの環境音が途絶えた代わりに、グラグラと、風による家の揺れと、扇風機のファンの回転だけが残った。
「台風がうるさいのかな？　それか扇風機」
『違うと思う。もっと近くで鳴っテる。ブォー、とか、ボォーン、って。なんか、静かに唸っテる？　みタいな』
「変なの」
しかし、サチの声がいつになく不快そうなので再び沈黙して目を閉じて耳を澄ます。
すると、空気の揺らぐ音の中に、幽かに人の声が混じった気がした。
「……サチ？」
今なんか言った？　と確認するも、『え？　いや、何も』と即答され、不審に思いつつ顔を上げる。と、目の前の窓に映り込む扉がゆっくりと開き、隙間から、
「ねぇ、」
ビクリと振り返ると、半身だけでこちらを覗き込む人影がある。
「……なんだ、お母さんか」
ホッと息をつく。
「なんだ、って何よ。お母さんもう寝るから。あんたもあんま遅くまで起きてんじゃないわよ」
「はぁい」
適当にやり過ごして再び会話に向き直る。と、バリバリと激しい雑音。が、しばらく黙っていると、やがてサチの声が。
『……っテさ、恥ずかしいよね』
「え、なんて？」
『電話に家族が乱入スるの恥ずかしいよねっテ』
「あぁ」
わかるぅ、と大げさに相槌をうつも、一度耳をそばだてたせいだろうか、風の音に気を散らされる。
『こないだ別の友達と電話しテテ。じゃあねっテ切っタら弟が隣の部屋で熱唱しテタの』
『今日は家族は寝てるから安心だケど』とサチの声が続ける。扇風機が五月蠅い。意外と近くで音がしてても気づかないよねぇ。『そうそう。案外相手のが早く気付いタりしテね』と話しているらしい音。ノイズと風。うんうん、と応じたところに、
『あ、静かになっタ』
彼女が話題を変えた。
『台風の目っテやつかな？』
耳を傾ける。
果たして風は少し落ち着いたようだ。ノイズは相変わらずだが。
えぇ、じゃあやっぱ明日学校あるかなぁ。
電話の向こうの彼女も
『えぇ、それだケはやだなぁ』
と笑っているようだ。
ザラザラと、音の乱れが激しい。
やがて、プツリ。プツリ。と声が途切れる。その間隙

に、妙に明瞭な音が混じる。
……サチ？
『なに？』
今なんか言った？
こたえる彼女の言葉をさえぎるように、今度は耳のそばではっきりと**「るううううう**